

日本英文学会中部支部 第 73 回大会(オンライン開催)プログラム

研究発表・シンポジウム要旨

開催日時:2021 年 10 月 16 日(土) 12:50～15:40

大会開催校:愛知大学

開催場所:Zoom ミーティング

(Zoom ミーティングへの参加方法については、会員の皆様に
メーリングリストでお知らせします。)

日本英文学会中部支部事務局

〒501-1193 岐阜市柳戸 1-1

国立大学法人東海国立大学機構 岐阜大学 地域科学部 内海智仁研究室内

E-mail: chubu@elsj.org

HP: <http://www.elsj.org/chubu/>

事務局・開催校からのお知らせ

【オンライン開催の概要について】

- ・今年度の中部支部大会はオンライン開催とし、Zoom を用いた同時双方向方式で実施します。
- ・大会当日には3つの Zoom ミーティングを、それぞれ「日本英文学会中部支部第 73 大会 第 1 室」「日本英文学会中部支部第 73 大会 第 2 室」「日本英文学会中部支部第 73 大会 第 3 室」という名称で開きます。それぞれの Zoom ミーティングで行われる研究発表やシンポジウムについては、次ページをご参照ください。
- ・Zoom ミーティングに参加するための URL は、10 月初旬に会員向けメーリングリストでお知らせします。
- ・シンポジウムが終了した時点で Zoom ミーティングを終了し、懇親会は実施しません。

【Zoom ミーティングへの参加に関するお願い】

- ・原則として、ご本名でご参加ください。
- ・発表者や講師を除く参加者のみなさまは、発表中は音声およびビデオを必ずオフにしてください。
- ・それぞれの研究発表やシンポジウムの後半で質疑応答の時間を設けます。ご質問時には音声をオンにし、ビデオは可能な限りオンにして、お名前・ご所属をお知らせいただいた上でご質問ください。
- ・支部大会 Zoom ミーティングの録画・録音は行わないでください。
- ・Zoom の基本操作については、今年 5 月に開催済みの日本英文学会第 93 回全国大会のウェブページ (<http://www.elsj.org/meeting/93rd/>) に置かれた「第 93 回全国大会 Zoom マニュアル」(<http://www.elsj.org/meeting/93/zoom-manual2.pdf>) という PDF 文書に詳しく解説されているので、ご参照ください。この PDF 文書には、右の QR コードからもアクセスできます。



【支部総会について】

- ・今年度の支部総会については、Zoom ミーティングではなく、昨年度と同様にメーリングリストと Google フォームを用いたオンライン形式で開催します。支部総会の開催期間は 10 月 16 日（土）～23 日（土）です。

日本英文学会中部支部第 73 回大会(オンライン開催)プログラム

開催日時:2021 年 10 月 16 日(土) 12:50~15:40

大会開催校:愛知大学

開催場所:Zoom ミーティング(第 1 室~第 3 室)

開会の辞 12:50~12:55 第 2 室

日本英文学会中部支部長 内田 勝

研究発表 12:55~13:20

第 2 室(アメリカ文学) 司会 倉橋 洋子(東海学園大学名誉教授)

「アメリカ建国とアメリカの庭園——Bartram's Garden を中心に」
竹腰 佳誉子(富山大学准教授)

第 3 室(英語学) 司会 松元 洋介(中京大学准教授)

「英語と日本語における物体の空間関係表現の差異に関する一考察
——英語前置詞の中心的意味と周辺の意味に焦点を当てて——」
藤原 隆史(松本大学准教授)

シンポジウム 13:30~15:40

第 1 室(イギリス文学)

『「旅」をめぐるイギリス小説——空間と語りの変遷』

司会・講師 石井 麻璃絵(愛知大学助教)
講師 杉浦 清文(中京大学准教授)
講師 畑中 杏美(弘前大学講師)

第 2 室(アメリカ文学)

『アメリカ文学と映画表象』

司会・講師 永瀬 美智子(愛知大学教授)
講師 梅垣 昌子(名古屋外国語大学教授)
講師 鈴木 元子(静岡文化芸術大学教授)
講師 千葉 洋平(中京大学講師)

第 3 室(英語学)

『発話行為と統語現象のインターフェース』

司会・講師 北尾 泰幸(愛知大学教授)
講師 森田 久司(愛知県立大学教授)
講師 川原 功司(名古屋外国語大学准教授)
講師 前澤 大樹(藤田医科大学准教授)

研究発表・要旨

第 2 室 (アメリカ文学)

司会 東海学園大学名誉教授 倉 橋 洋 子

アメリカ建国とアメリカの庭園——Bartram's Garden を中心に

富山大学准教授 竹 腰 佳 誉 子

建国の父をはじめとするアメリカの礎を築いた当時の知識人にとって、自然界への関心が欠かすことができなかったことは、ベンジャミン・フランクリンやトマス・ジェファースンの活躍から明らかである。ジェファースンがヨーロッパで流布していた「新大陸退化説」を論駁すべく博物学的なアプローチで国内外において奔走していた頃、フィラデルフィアにおいて憲法制定会議が開催されていた。

憲法制定会議の参加者の多くは農園主経験者であり、農業や植物に対する造詣が深かった。議論が行き詰まる中、何人かの参加者が 4 か月に渡る会議中に訪問した植物学者バートラムの庭園は、他のアメリカの庭園とは異なり、13 州の植物がそれぞれの特徴を保ちながら、その特徴や性質を誇示することなく、すべてがともに茂っていた。新生アメリカが目指す姿を体現していたともいえるバートラムの庭が建国の父たちに与えた影響について考えてみたいと思う。

第 3 室 (英語学)

司会 中京大学准教授 松 元 洋 介

英語と日本語における物体の空間関係表現の差異に関する一考察 ——英語前置詞の中心的意味と周辺的意味に焦点を当てて——

松本大学准教授 藤 原 隆 史

物体と物体の空間関係を表す言語表現には英語の前置詞があるが、前置詞は本来機能語とされ、内容語に比べれば意味が希薄であるとされている。しかし、Tyler & Evans (2003)をはじめとして、認知意味論研究では前置詞に豊かな意味用法を認めている。そこでは、前置詞のコアミーニングであるイメージスキーマを規定し、各意味用法がそこから派生するという考え方をしている。一方で、こういったイメージスキーマの心理的実在性について、ネイティブスピーカーや英語学習者はイメージスキーマをどこまで意識しているのかという問題がある。本研究では、発表者が 2020 年度に行った前置詞 in の「容器性」に関する研究を出発点とし、前置詞 in, at, on の意味用法のうち、いわゆる周辺的とされる意味用法に着目する。周辺的意味用法におけるイメージスキーマの心理的実在性についての調査について報告し、そこから見えてくる研究課題や、教育へ応用する上での課題について議論する。

シンポジウム・要旨

第1室(イギリス文学)

「旅」をめぐるイギリス小説——空間と語りの変遷

司会・講師	愛知大学助教	石 井 麻璃絵
講師	中京大学准教授	杉 浦 清 文
講師	弘前大学講師	畑 中 杏 美

「旅」はイギリス文学において普遍的なテーマの一つと言えるだろう。旅行記や航海記に代表される紀行文としても、巡礼などにおけるメタファーとしても、旅はイギリス文学のなかで多くのモチーフと考察要素を提供し作品に深みを与えてきた。13世紀から17世紀まで、旅は上流階級の子弟が教育の一環として大陸旅行に出かけるグランド・ツアーが主流だった。18世紀後半に起こった産業革命は、国内における旅する人口を劇的に増加させる。道路や馬車の改良は旅を人々にとって安全で安価、身近なものにさせ、また、それまで許されなかった女性の一人旅の機会も生まれるようになる。鉄道の出現は庶民に遠出を可能にさせ、裕福なミドルクラスの家族が週末の保養に、労働者階級の人間が職探しや余暇を求めて群や州を移動するなど、旅の目的や目的地はさまざまになる。さらに、植民地政策によるイギリス領土の拡大は人々を大陸を超えた世界への旅へと誘い、後にポストコロニアル理論など新たな文学批評を生み出した。本発表はエリザベス・ギヤスケル、ジーン・リース、ミュリエル・スパークの作品を扱い、19世紀から20世紀にわたる様々な社会事象や作者自身の体験を考慮しながら「旅」や「移動」の表象を探るものである。人々の行動範囲の広がりがいかに文学に影響を与えてきたかを、空間と肉体、自己と他者、作中の語り、アイデンティティなど様々な視点から読み解き、イギリス文学における旅の重要性を指摘したい。

『北と南』における旅するヒロイン——旅のナラティブとアイデンティティの確立——

石 井 麻璃絵

エリザベス・ギヤスケルは『北と南』(1855)の題名を、当初、主人公の名前「マーガレット・ヘイル」を想定していた。しかし、ディケンズの提言により、南北の対立を鮮明にする『北と南』に決定した。主人公マーガレットはロンドンの叔母の家で育ち、生家の農村ヘルストンに戻った後、(マンチェスターがモデルである)産業都市ミルトンに移住する。産業革命後の変動するイギリス社会のなかで、南部の農村と北部の工業都市の特徴は、そこに住む人々の生活・意識に反映された。マーガレットは南部から北部への旅をとおして、それぞれの土地とコミュニティの相違を体験し、反発と順応を繰り返しながら成長していく。本発表では、19世紀の中産階級の女性の旅の可能性を、主人公のアイデンティティの確立とからめながら探りたい。

故郷喪失者との対話——Jean Rhys による 1936 年の帰郷をめぐる——

杉 浦 清 文

旧英領ドミニカ島の首都ロゾーで生まれた白人クレオール的女性作家 Jean Rhys(1890–1979)が英国に渡ったのは、1907年のことだった。その後、Rhys は 1936 年に人生でたった一度だけ、ドミニカ島に帰郷している。このとき、Rhys は、マルティニークやセントルシアも訪れたという。しかし、西インド諸島の歴史を振り返ると、1930年代は、＜黒人性＞が新たな形で発見された時代であった。この帰郷を通して、Rhys は自身の複雑な立ち位置を再認識するに至っただろう。何よりも、こうした経験が 1966 年に出版された *Wide Sargasso Sea* の＜語り＞に大きな影響を与えたことは間違いない。本発表では、Rhys が 1936 年に行った

帰郷に注目し、文学的想像力を介した＜対話＞を通して、そのときの彼女の心情を汲み取っていきいたい。そして、その際、セント Kitts 生まれで英国育ちの作家 Caryl Phillips (1958-) が 2018 年に発表した——まさに Rhys のこの帰郷を題材にしている——*A View of the Empire at Sunset* の示唆に富んだ＜語り＞にも耳を傾けていく。

Spark のなかのアフリカ

畑 中 杏 美

Muriel Spark は、小説家として世に出るきっかけとなった “The Seraph and the Zambezi” (1951) をはじめ、いくつかの短編において、アフリカで暮らす人々や、かつてアフリカで暮らしていた人々を描いている。世界各所を旅し、その経験を作品創作に活かしてきた Spark であるが、故郷スコットランドを離れ、生まれて初めてたどり着いた異郷の地アフリカは、単なる通過点にすぎず、作家としての Spark の人生に影響を与えた地であった。本報告ではまず、Spark の自伝と、Martin Stannard による Spark の伝記から、アフリカでの暮らしに関する記述をたどり、短編作品とのつながりを見出す。情報の開示が不十分であるという批判をうけた Spark の自伝の虚構性に注目することで、過去と現在、現実と幻想が入り混じる Spark 独特の虚構の世界の萌芽を、Spark のアフリカ体験に読み解きたい。

アメリカ文学と映画表象

司会・講師	愛知大学教授	永 瀬 美智子
講師	名古屋外国語大学教授	梅 垣 昌 子
講師	静岡文化芸術大学教授	鈴 木 元 子
講師	中京大学講師	千 葉 洋 平

英語圏におけるアダプテーション研究は 20 世紀後半に始まったとされるが、日本においても 21 世紀に入って活発に行われるようになった。本シンポジウムで扱うアダプテーションとは、活字からパフォーマンスへの移行をともなう改変のプロセスとそのプロダクトを指す。当初より小説と映画とはメディアの違いから忠実に翻案することはできないこと、それゆえ翻案された作品(プロダクト)は二次的な作品であり、「原作」(オリジナル)には劣るという固定観念があったものの、両者はそれぞれ異なる作品であることは受容されてきた事実である。これまでに多くのアダプテーション理論を論じる著書が刊行されてきたが、2006 年に出版された Linda Hutcheon の *A Theory of Adaptation* では、アダプテーションがオリジナルの作品に劣るというこれまでの固定観念を否定し、アダプテーションをメディアの異なるテキストとテキストとの間のインターテクスチュアリティと捉えている。

本シンポジウムでは Hutcheon の理論を応用して、各講師は選択した文学作品とそのアダプテーションである映画作品の間テキスト性の分析を試みる。視点設定、時間、内面的なものの外在化など各作品の特徴に焦点を当て、アダプテーションによって付加されたものや切り捨てられたものが示唆する映画制作者の意図、原作の改変、それによって生まれた、或いは、失われた効果を分析し、映画作品について独立したテキストとして解釈を試みる。さらに、アダプテーションによって生み出される映画表象の可能性を探る。

語りと映像の対話——William Faulkner の「旋回」と「脱出」

梅 垣 昌 子

Linda Hutcheon は、*A Theory of Adaptation* において翻案と検閲の関係について述べるにあたり、Hemingway や Dos Passos とともに William Faulkner の名前に言及している。Faulkner は 1920 年代後半以降、重要な長編や膨大な数の短編を発表するが、その一方で、ハリウッドの脚本家として数多くの映画製作に関わっている。1930 年代のはじめから 1950 年代に至るまで、実現しなかったものも含めると 50 以上もの企画に携わった。その中には、自身の短編「急旋回ボート」(“Turnabout” 1932)を自ら脚色した映画『今日限りの命』(*Today We Live*, 1933)や、Hemingway の原作を共同脚本で映画化した『脱出』(*To Have and Have Not*, 1944)が含まれる。また、フランス映画『木の十字架』(*Les Croix de Bois*, 1932) の映像を利用した『永遠の戦場』(*The Road to Glory*, 1936)にも関わっている。本報告では、プロセスとしてのアダプテーションに重点をおき、間テキスト性の分析をとおして、映画表象の可能性が「翻案元」の作家の創造力にいかに関与するかを探る。

Blade Runner (1982, 1982, 1992) に見る共感力

永 瀬 美智子

Ridley Scott 監督の *Blade Runner* は Philip K. Dick (1928–1982) の *Do Androids Dream of Electric Sheep?* (1968) のアダプテーションである。この作品には原作で人間の感情や共感力を表す共感ボックス、マーサー教、動物を飼うことなど、Dick が作品のテーマとする要素が一切削除されている。原作がアンドロイドと人間との違いを共感力の有無だとしていることを鑑みれば、それらを削除したこのアダプテーションはアンドロイド対人間の構図だけを借りた別物のように見える。しかし、アダプテーションにおいてアンドロイドが人間と同様の感情と認められるもの

に従って行動するエピソードが描かれることによって、人間とアンドロイドの境界線がより曖昧な形で提示されるのである。このアダプテーションには、オリジナル版、完全版、最終版と 3 種類の版があり、大きく異なる作品の終わり方はこの共感力の問題と深く関わっている。本発表ではアダプテーションに描かれる共感力が時代を反映して原作に示される共感力とは別の問題提起をしていることを示す。

Snow Falling on Cedars の映画表象——虚構を支えるリアル、映像イメージの畳みかけ

鈴木元子

シアトル近郊の島で高校の英語教師をしていた David Guterson は、島に暮らす日系人の史実をもとに、*Snow Falling on Cedars* (1994) を執筆した。それは 400 万部発行のベストセラーとなり、30 カ国語に翻訳され、1999 年に映画化された。約 350 ページの原作を 2 時間の映画にするために、ストーリーは再構成される。カズオに関する部分は縮小し、イシュマエルとハツエの幼い無垢な恋愛が前景化される。第二次世界大戦前のアメリカ人少年と日系人少女のロマンスという虚構を歴史的事実と時代考証が支え、収容所体験のある日系人がエキストラ出演した。最初の脚本にあったヴォイスオーバーは却下され、代わりに、イシュマエルの 20 年に及ぶ過去と現在の往来が、白昼夢のような、畳みかけるような映像イメージで表現され、ドラマ性が創出された。実際、監督と原作者が数日間寝起きを共にして構想を練り工夫に工夫を重ねたという、珍しいアダプテーション作品なのである。

生態学から分子生物学へ: *Annihilation* (2014, 2018) における生物学者の詩学

千葉洋平

Alex Garland 監督・脚本の *Annihilation* (2018) は、Jeff VanderMeer の小説 *Annihilation* (2014) の改作である。この 2 つの作品、つまり映画と小説の間の類似点は数少ない。不可思議な生き物が生息する「エリア X」や灯台や基地といった設定と、語り手がそこに配置される女性専門家のうちの 1 人である生物学者である点、そして語り手が変身を経験するという点のみが厳密な意味において 2 作品の共通項である。映画における様々な改変部分を列挙することは難しくないが、最も興味深い要素は、メディアを越えた改変を反映するかのように、語りの形式とそれが伝達する内容の形態が変化していることだ。つまり、物語内の語りの媒体自体が変化することによって、語られる「エリア X」内の自然現象の質も変化するのである。本発表では、小説において日誌や書き言葉だったものが、映画においては記録映像や話し言葉へと変更されている点に着目し、それぞれのメディアを通した自然の理解可能性 (intelligibility) の違いを明らかにする。

発話行為と統語現象のインターフェース

司会・講師 愛知大学教授 北 尾 泰 幸
講師 愛知県立大学教授 森 田 久 司
講師 名古屋外国語大学准教授 川 原 功 司
講師 藤田医科大学准教授 前 澤 大 樹

理論言語学においては、統語・形態・意味・音声など、それぞれモジュール化を図った上で研究を行うことを前提としている。しかし、単一のモジュールではなく複数のモジュールに関与する言語現象も多く、とりわけ生成文法理論が制約に基づいて派生を考える理論モデルから最適解である派生を探るモデルになったミニマリスト・プログラム以降は、モジュール間にまたがるインターフェース研究の必要性が叫ばれるようになってきた。

本シンポジウムでは、統語的側面だけではなく、意味的側面・音声的側面・談話的側面が深く関わってくる「発話行為(Speech Act)」に関与する統語現象について、複数のモジュールにまたがるインターフェース論の立場から理論的分析を行う。具体的に、発話行為が関与する統語範疇と形式意味論に基づく指標付与、発話行為に用いられる統語文の命題的意味と談話の分業、発話行為の観点から見た助詞残留現象の統語特性と意味特性、英語分裂文における談話的要素と統語的移動制約について分析する。

本シンポジウムの分析を通して、発話行為および談話のような統語論の範疇から外れるように思える言語現象にも統語現象が絡んでおり、それは他のモジュールとのインターフェースの立場から捉える必要があることを明らかにする。加えて、理論言語学の研究におけるインターフェース分析の必要性について検証する。

発話行為句(SpeechAct Phrase)を伴わない発話行為

森 田 久 司

生成文法研究者のみならず、言語類型論研究者の間でも、全ての言語において、文は3層構造をなすと考えられている。一番内側に VP(動詞句)、その外側に TP(時制句)、そして、一番外側が CP(補文標識句)である。それぞれの主な機能として、VP 内で、意味役割が動詞から項に対して付与され、TP では、VP の表す event の時制を決定し、CP では、平叙文、疑問文、命令文などの文の種類の決定とともに、発話行為に関わる情報もここで表示されると一般的に考えられている。しかしながら、日本語の丁寧語と言われている「です・ます」は、話し手が聞き手に敬意を表しているという点で、一種の発話行為と見なすことができるが、上記の3層構造に照らし合わせると、「です・ます」の出現場所は、CP どころか、TP よりも内側の VP 内である。このような現象は、言語学的に非常に稀である。本発表では、「です・ます」を一種の指標表現(indexical)と見なすことを提言する。また、英語の時制の一致も、(日本語の時制と同様に)「です・ます」と同種の指標表現であることを主張する。

対話行為における分業

川 原 功 司

英語の平叙文、疑問文、付加疑問文ではイントネーションの上げ下げで話し手の叙述的態度を区別することができる。

- (1) a. Ann left ↑, ↓.
b. Did Ann leave ↑, ↓?
c. Ann left ↓, didn't she ↑, ↓?

この種の異なる文タイプの核となる意味は、意味的・論理的なものであり、談話上の効果は付随的に現れてくるものである。平叙文も疑問文もどちらも命題の集合を表すという *inquisitive semantics* を前提にすれば(Ciardelli et al., 2019)、核となる命題の意味と談話上の効果を分業して記述することが可能になる(Farkas and Roelofsen, 2017)。

日本語では平叙文が裸のまま使用されることがほとんどなく、対話行為における話し手の態度を様々な助詞で表すのが通常であり、疑問文でも頻繁に使用される。

(2) アンは出て行った{よ, ね, よね, かなあ}。

こういった心的態度を表す助詞が命題の集合を補部にとると考えれば、心的態度が表す談話上の効果は意味論上の核とは別個に記述することが可能になる。本発表では、談話上の効果と命題の意味を区別して記述するのが理論的に妥当であるというだけでなく、自閉症スペクトラム児が心的態度を表す助詞をほとんど使用しないという事実に対する解答にもなりえるということを指摘する(Yoshimura et al., 2020)。

助詞残留削除と引用句、発話行為投射

前 澤 大 樹

日本語に於ける助詞残留削除(*particle-stranding ellipsis*, PSE)とは、名詞句が助詞を残して削除される現象で、主に(1)のような口頭での会話の応答に見られる。

(1) A: 田中君は？

B: Ø はね、会社を辞めたよ。

(cf. 服部(1960: 452))

この現象の観察は恐らく服部(1960)に遡るが、原理的な説明の試みは比較的近年見られるようになり、生成文法の立場からも幾つかの分析がなされている。省略現象の一種として、論点の一つは PSE が LF コピー・PF 削除の何れによって派生されるのかだが、どちらの立場をとる分析も PSE が基本的に項削除(*argument ellipsis*, AE)と平行的な振る舞いを示すことを前提とし、従って類似した扱いが可能だと想定している。しかしながら、詳しく観察すると PSE と AE の振る舞いには違いがあり、特に Charnavel (2019)の言う *supersloppy* 読みが AE では可能だが PSE では不可能な点が問題となる。この事実を捉えるため、本発表では PSE の削除部分が本質的に引用句の特性を持つと主張し、談話役割が統語的に投射するという Tenny and Speas (2003)の見解の下で、具体的分析を提示する。また、これらの議論の過程で LF コピー分析の妥当性も示す。

統語と談話構造——it-cleft 分裂文の派生——

北 尾 泰 幸

分裂文は焦点句を際立たせる文体上の一つの方略であり、その焦点句形成には談話(ディスコース)の要因が強く影響する。しかし、談話面で焦点を置く必要がある句ならば、どのようなものであっても分裂文の焦点位置に生起できるわけではなく、その焦点句形成には統語的な制約が深く関与する。本発表では、英語分裂文(*it-cleft*)における統語特性に焦点を当て、分裂文には談話的要素よりも、むしろ統語的要素が深く関わっていることを明らかにする。その際、とりわけ移動した要素からの更なる要素の摘出を禁ずる「凍結原理」の面から分裂文を検証することにより、分裂文の統語特性および派生構造を明らかにする。また分裂文と *wh* 演算子移動が関与する文を中心に凍結原理の駆動の有無を検証することにより、焦点句の統語範疇に応じて異なる派生構造を仮定する必要性や、*it-cleft* 分裂文と制限関係節との類似性についても検証し、談話が大きく関わる分裂文に、統語特性が深く関与していることを明らかにする。

大会関係役員・委員一覧

支部長	内 田 勝	(岐阜大学)
副支部長	長 澤 唯 史	(相山女学園大学)
支部選出評議員	山 本 卓	(金沢大学)
支部代表理事	滝 川 睦	(名古屋大学)
事務局長	内 海 智 仁	(岐阜大学)
事務局長補佐	林 日佳理	(岐阜大学)
書記	平 野 順 雄	(相山女学園大学)
監事	中 川 直 志	(中京大学)

大会準備委員 (◎委員長 ○副委員長)

英文学

- 丸 山 修 (静岡大学)
- 三 原 穂 (愛知県立大学)
- 伊 藤 裕 子 (中部大学)

米文学

- 鈴 木 元 子 (静岡文化芸術大学)
- 竹 野 富美子 (東海学園大学)

英語学

- ◎吉 田 江依子 (名古屋工業大学)
- 久 米 祐 介 (名城大学)
- 松 元 洋 介 (中京大学)
- 川 端 朋 広 (愛知大学)

大会開催校委員

- 石 井 麻璃絵 (愛知大学)
- 川 端 朋 広 (愛知大学)
- 北 尾 泰 幸 (愛知大学)
- 永 瀬 美智子 (愛知大学)